

明治維新百五十年

酒と江戸無血開城

〔後編〕

作・原口幹朗



イラスト：成田安妃子

迎え撃つ体制を整えて、ありとあらゆる策を講じてきた勝は、背水の陣で西郷と渡り合ったのである。新門辰五郎も、勝の指示通りに江戸総攻撃に備えて万全の態勢を敷いていた。慶応四年三月十三日、第二回交渉は降伏条件の決着を見ず、談判は翌十四日に持ち越された。

勝は、別れ際に、
「西郷さん、天璋院篤姫様より、書状を預かって参りました。お目通し下さるようお願い申します。」と言うと、文を手渡した。

三月十四日、約束の時間に西郷は現れず、勝はじつと冷静に構え西郷を待っていた。
程なくして、西郷が入ってきた。

「まっごてすんもはん。お待たせしました。」と言うと、深々と頭を下げた。

第二回交渉では、新政府側は徳川慶喜の厳罰処分、並びに徳川方に加担した者の処罰、徳川家の廃絶、江戸城明け渡し、武器弾薬および軍艦の引き渡しを降伏条件として提示した。一方、勝は、徳川慶喜が恭順の意を表していることを掲げて、万国公法上でもまた人道的にも反していると強硬姿勢を問ひ質し、

慶喜公の助命と徳川家存続継承を含めた六つの降伏条件を示した。会谈は、互いに相反する条件にて、事態は折り合いが付かず硬直していた。

そのような時、勝が放った二言が局面を大きく変えた。

「西郷さん、振り上げた拳の落とし所で困っていらつしやるなら、この勝の首を差し上げましょう。その代わり、慶喜公の生命は保証していただきたい。西郷さん、もし立場が逆として、斉彬公がそのお立場として、西郷さんなら我が身を投げ打つても、島津様をお守りするのではあるまいか。」と勝は迫った。

じつと目をつぶったままの西郷であったが、その大きな目を開くと言った。

「よく分かりました。いろいろ難しいことありましようが、こん西郷が一身にかけてお引き受けしませぬ。明日の江戸総攻撃は中止しもんそ。」と。

これで、三月十五日の江戸総攻撃は回避され、戦禍に巻き込まれることなく江戸百万の民は救われたのである。談判は、徳川方の降伏条件が受け入れられる形で決着し、謹慎中の徳川慶喜は水戸藩お預けとなり、江戸無血開城

は成し遂げられた。

そして談判の終わりに、西郷が酒を出して言った。

「勝さん、こん酒は、膳場さあからでござす。会谈が決着した暁にと。一献傾けもんぞ」と。

そう言う、西郷は黙ってなみなみと酒を注いだ。勝は、注がれた酒の名が気になっていた。そしてじつくりと眺めて言った。

『さざれ石』という酒を秀吉さんが」と。

そして勝は、その酒の表貼りに書かれていることが、西郷を突き動かしたと感じた。秀吉が持参した『さざれ石』という酒には、

「君が代は、千代に八千代に、さざれ石の 巖となりて 苔のむすまで」と書かれていたのである。

秀吉は、無性に西郷に会いたくなり、気づくと三田の薩摩屋敷の前に立っていた。西郷も快く秀吉を迎えた。長らく西郷の身を案じていた秀吉は、目の前に現れた西郷を見た瞬間に張り詰めていた糸が切れたかのように、涙が込み上げてきた。両者とも気心の知れた仲であり、顔を見合わせることにしばらく言葉は必要なかった。秀吉は、積もり積もった西郷への愛が自然に溢れて、とめどなく流れる涙を抑えることができなかった。言葉にならない秀吉を察するかのよ

うに、西郷が先に口を開いた。

「秀吉さま、長らくご心配をおかけしました。まっことすんもほんじゃした。

勝さんとの談判の折には、坂本さあやら秀吉さあが何度も脳裏に浮かびました。また勝さんは、やっぱい妻かお人でござした。言うことすべてに筋が通つちよい

もす。一点の私心なく公を貫いたことには全くもって敬服します。」と西郷は、本心で半ば安堵したかのように語った。

秀吉も、落ち着いてきた様子で話し始めた。

「西郷さま、よくぞご無事で。またお会いできて光栄に存じます。駿府では、大変ご無礼な事をしたのではと、ずっと気になっておりました。お気に障つたならお許し下さい。」と秀吉は、自分の取つた行動を恥じるかのように言った。

それに対して西郷は返した。

「秀吉さま、ないも謝ることなどあいもはん。秀吉さまは、己の立場で役割を果たされたらいい。立派じゃ思いました。」

そして秀吉は西郷に問うた。

「西郷さま、複雑な心境です。何故同じ日本人が敵対しなければならぬのでしょうか。もし、坂本さまが生きていたらつしゃれば、この日本はどう変わったであろうかという考えてしまいます。」と。

西郷は答えた。

「秀吉さま、何か大きく新たなものを生み出す時は、犠牲はつきものでござす。

こん世は、尊い犠牲の上に成り立つちよい

もす。失われた尊い犠牲を決して無駄にしてはならないもん。いつかは、そんな犠牲

になった者たちの魂を我が一身で受けて立つ覚悟が無ければ、事は成し遂げられもん。使命を帯びて生まれてきたも

んは、そんな使命を果たす責務があいもす。天を敬いそれに従い、万人への慈愛を忘れてはならないもん。」と。

秀吉は、限りなく広い優しさに包まれていような、何とも不思議な心持ちで、人を愛するということをあらため

て嬉しく思い、ご縁の大切さを痛感し、すべての人に感謝の念を抱き、人の幸せが自分の幸せだと思ふようになった。そしてまた、生涯この西郷というお人について行きたいという気持ちでいっぱいであつた。

また間もなくして、膳場秀吉は勝郎に呼ばれた。

「秀吉さん、本当に有難うよ。おめえさんのおかげでこの江戸は救われた。」と、勝は秀吉に礼を言った。

「勝さま、ご冗談を。」と秀吉は返した。

勝が言った。

「実は、今回の会谈は決して俺一人の力じゃねえ。膳場さんの他に、天璋院篤姫様や山岡鉄舟、英国公使のハリパークスが力添えがあつたからござと思つているのさ。そして、何よりもあの「さざれ石」なる酒が江戸を救つたのよ。いや

この国家を救つたに等しい。」と。

そして勝はさらに続けた。

「実は、新門辰五郎からおめえさんの事はよく聞かされていたのさ。西郷と親密なこともな。駿府まで足を運んでもらつた訳も、西郷に顔を見せるだけで良かった話よ。おめえさん方が江戸に暮らしていることを伝えたかっただけのことよ。

なぜ俺が膳場さんを遣わしたのか、西郷は、そこを見抜く男よ。また先の会見では、西郷たるやこの俺を敗軍の将と見ることなく、終始敬意を持って談判に応じてくれた。この会谈は、西郷でなければ成し得なかつた。まさに、この時代に必要とされた巨人よ。俺は今までに、恐ろしいものを二人見た。一人は横井小楠で、もう一人が、西郷隆盛よ。横井の思想を西郷の手で行われたら、敵うものはない。

膳場さんが、西郷隆盛という男に惹かれる訳が分かるというものよ。」

と云つて勝は笑つた。

そして、勝は続けて言つた。

「秀吉さん、おめえさん酒屋を家業としていたそうじゃねえか。ひとつ相談に乗つてもらいてえ事があんのさ。心配いらねえ、商いの話よ。」と言つた。

そしてさらに勝は続けた。

「実は、たいそう世話になつたお方がいて、恩返ししてえのさ。一人は、紀州の山さ印醬油の濱口梧陵、もう一人は、灘で代々造り酒屋を営んでいる本嘉納商

店(菊正宗)の嘉納治郎右衛門よ。俺が貧乏暮らしをしているころ、縁あって渋田利右衛門というお人と出会い、何かと目をかけてもらっていたのさ。この二人と引き合わせてくれた後は、長らくこの二人が俺を支援してくれたって訳よ。このおかげで今の俺があるというもの。山さ印醬油と菊正宗を江戸で商つてくんねえかい。」と、勝は秀吉にお願いしたのである。

秀吉の奮闘あり、山さ印醬油は商い高が増え、紀州から房総の銚子へ移つてきた。また菊正宗も、名だたる料亭から蕎麦屋まで入り込み人気銘柄となった。

また、教育がこれからの新しき世を作るという勝の進言に賛同した嘉納治郎右衛門は、同業の嘉納治兵衛、山邑太左衛門らとともに、灘から良き人材をと灘校を設立した。また嘉納治郎右衛門は、逸材の集まる東京帝国大学に入るも経済的事情により生活困窮する学生を支援すべく寄宿舎まで運営し、舎監には社員を外向させるなど広く人材育成に尽力した。

秀吉は、頻繁に勝邸を訪れるようになっていた。ある日、洗足池ほとりの勝の別邸「洗足軒」に呼ばれた。赴くと、まだ若い青年を紹介されたのである。

「この男は越後出身の川上善兵衛という者で、葡萄酒を造ろうとして居るのよ。川上家とも長い付き合いで、実は永らく支援を受けていたのさ。異国に負けない

葡萄酒をこの国でも造れないものかと話していたところ、是非うちでやらせて欲しいと言つて始めたつて訳さ。この男は熱心で、葡萄酒を造るにはまず葡萄からとひたすら勉強して、異国から苗を取り寄せ、今ではこの国に合う新しい葡萄を作っている面白い男よ。そこでだが、秀吉さんよ、善兵衛の造つた葡萄酒を東京で商つてみねえかい。」と勝は言つた。

「ええ、是非ともうちで扱わせていただきますのは山々ですが、ただ葡萄酒はまだまだ時間がかかるのでは」と返答した。

「もちろんまだ先の話よ。だがこれからこの国は、西洋文化を取り入れ、大きく変わる。異国の良きところはもつと取り入れ、西洋との圧倒的な国力の差を縮めなければならぬ。薩摩の島津斉彬公は、こうなる事を分かつていたかのように異国と対等に渡り合うべく、逸早く殖産興業に着手しておられた。そればかりではない。天璋院篤姫様を徳川に輿入れさせ、徳川の行く末を見据えていたのさ。俺が手に持っているこの江戸切子も、元はと言えば薩摩から伝わつたもの。そしてこの中に入っているウキスキー、実に美味えだらう。エゲレス国のものよ。

「日本はここですか。こんな小さな国なのですね。」と驚愕した。

西洋では、こんな美味えもん飲んで暮らしているんだぜ。これは頂きものの手拭いだが、天璋院篤姫様が直々にお縫いになつたもので、メリケン国製のミシン

「秀吉さん、もう一つ、この飯を食べてみな。」と言つと、ある食べ物を差し出した。秀吉は、初めて目にするもので驚きながらも、勝に言われるままその食べ物を食べてみた。

「これはなんと。こんなに美味しい飯は、初めて食べました。どこの食べ物で。」と勝に聞いた。

勝は答えた。

「秀吉さん、これはフランス国の食べ物で、デミグラスソースなる汁よ。それを白飯にかけてただけのもの。匂いといい、味といい実に美味えだらう。いいかい秀吉さん、この汁はソイソースなるものが入っているのさ。ソイソースとは日本の醬油のことよ。パリ万国博覧会で、初めて日本から徳川幕府と薩摩藩、佐賀藩が参加した。その時に幕府が出した紀州の醬油がフランス人に人気で、驚くことに、皇帝ナポレオン三世が甚く気に入り、料理人にかくし味として使させたという話さ。美味いものを追求する国の文化は、凄えと思わねえかい。異国の方が、日本の醬油に目を向けているのよ。坂本はそれを逸早く察してか、醬油や酒を諸外国との貿易の品に考えていたつて訳さ。これから日本も開花期を迎える。諸外国との外交を迫られる時代がきつと来る。国賓を迎えるにあたり、外交儀礼など備えをしなければならねえのさ。明治天皇が、諸外国の笑ひ者にならぬようにな。」と勝は話した。

「坂本さまが、熱く語られていたのを思い出しました。龍馬さまの思い描いていた日本に近づきつつあるような気がいたします。」と、秀吉は返した。



そしてまた日本の将来と、それに対してどう対処すべきかといった勝の考えを聞いた秀吉は、今まで自分がいかに井の中

の蛙であつたかと思ひ知らされ、諸外国の事を無性に学びたいと思つたのであつた。「それから新門辰五郎であるが、静岡へ行つてもらう事

になつた。」と勝は、説明を始めた。「えつ、新門さまが駿河へ」と秀吉は尋ねた。

「慶喜公のお供さ。しばらく静岡でお暮しになる。その警護よ。なに、じきに帰ってくるさ。」と勝は答えた。

秀吉は、直ぐに新門辰五郎と神田の「おてだま」で会つた。

「新門さま、勝先生からお聞きしました。駿河へ行かれるそうで。」

「秀吉さんよ。おめえさんには何かと世話になつた。有難うよ。駿府で百姓よ。勝先生が言うには、

静岡は茶業に向いていそうで、中でも日本平で美味しい茶を作つて売るとたいそう儲かるらしい。慶喜公一行の世話になる訳にはいかねえのさ。自分らの食いつ持は、自ら稼ぐ他ねえという話よ。清水の次郎長も茶づくりの名人ととも待つてくれているそうで、頼もしい限りよ。」と秀吉を氣遣つた。

秀吉は、返した。

「新門さま、お礼を言うのは私の方です。私は、ご縁があり素晴らしい方々とお近づきになれました。私は、このご縁に感謝してやみません。日本を大きく変えた方々と同じ時を過ごせた事が、何より誇りなのです。坂本さま、西郷さま、勝さま、新門さまと、みな偉大なお方ばかり。そんな方々とお酒を酌み交わすことができ、この上ない幸せを感じてならないのです。如何なる時も最後は人と人だという事を教わりました。そして西郷さまが唱えられた「敬天愛人」は、私には余りにも大きすぎますが、社会のため人のために、微力ながら酒を通じてお役に立てるよう努めたいと考えるようになっていました。酒が縁でどれだけの出会いがあり、世界が広がったことが。

私は、酒屋を家業として本当に良かった。酒屋冥利に尽きると思っています。実は私は、あのお二人の会見の前の日の三月十二日に、薩摩藩邸に、あるお酒をお持ちしました。もし江戸が戦渦に巻

き込まれるようなことになれば、酒蔵も消失し大切なお酒も飲めなくなり。それよりも美味しいお酒があることにより、どれだけ人々の心が豊かになることかと手紙を添えて。お酒がどれほど大事な歴史的な局面で飲まれたことでしょうか。お酒ほど素晴らしい飲み物は他にありません。これから私は、もっともつとお酒の素晴らしさを伝えていきたいと考えています。そしてまた酒を通じて、この世界に恩返ししたいのです。人とお酒は、切つても切れない関係なのですから。」と。

近代日本国家の礎となつた明治維新は、日本を変えようと我が身を顧みず突き進んだ志士たちを、陰で支えた人たちがいたからこそ、成し遂げられたと言つても決して過言ではない。そういう意味では、維新は身分を問わず、皆で成し遂げたとも言えるのではなからうか。幕末という動乱の世を駆け抜けた志士たちは、日本の将来を語る時、明日をも知れない我が身を鼓舞するとき、そして亡き同志たちを偲ぶるとき、酒を酌み交わした。明治維新の原動力として、酒が果たした功績は大きい。酒とは、いつの時代も人とともに歩んでいるものである。

※の物語はフィクションであり、事実とは関係ありません。

了